Ⅰ　はじめに

いじめ・体罰など様々な問題が取り沙汰される中、学校では基礎学力の向上が声高に叫ばれ、授業内容の見直しが進められるなど、子ども達を取り巻く環境は大きく変化しています。これからを生きる「いばらきの子ども達」には、どのような力が求められているのでしょうか。

学校教育のグローバル化にも注目が集まっています。しかしその一方で、地域間格差はさらに広がり、7人の内1人の子どもは経済的理由から進学が困難になるなどしているといわれます。そんな中で、生涯を通じた豊かな学びを実現するには、どのような取り組みが必要とされるのでしょうか。

認定ＮＰＯ法人リヴォルヴ学校教育研究所では、不登校や学習につまずきがちな子ども達の支援に取り組んでいます。子ども達がつまずいたとき、私達はその責任を安易に転嫁しがちです。しかし世の中に、完璧な人など存在し得るでしょうか。そもそも、つまずきはマイナスとばかりに捉えるべきものなのでしょうか。試行錯誤の繰り返しの中から新たな発見が生まれるように、子ども達も、そして私達もつまずきを経て成長するものではないのでしょうか。

今回のヒアリング調査では、「親が変われば、子どもも変わる」と言われても「そんなに立派にはなれない」という声が多く聞かれました。「自信を失って育児書を手にする。するとまたそこに書かれていることを読んで『自分はダメだ』と自信を失ってしまう」という声もありました。子育てに悩んでいる人、ストレスを抱えている人がいることは事実だと思います。強い人もいれば、弱い人もいます。大きな力をもつ人もいれば、小さな力しかもたない人もいます。しかし大きな力をもつ人は、小さな力を寄せ合うことの素晴らしさを忘れがちでもあります。

本事業では「いばらきの可能性」を感じることもできました。「子育てトークカフェ」では、「自分も何かをしたい」という思いを強く持っている人々がたくさんいることを知ることができました。「自分自身がこんな場がほしかったから」と、地道な活動を続けていらっしゃる方々とも、ふれあうことができました。

「いばらきの子育て・子育ち環境」を考えるとき、専門家や行政との協働が不可欠であることは言うまでもありません。しかしこれからの「いばらき」を考える上でもっとも大切なことは、一人ひとりの「自分も何かをしたい」という思いを尊重すること。たとえその力が小さなものであったとしても、すべてはその力を生かすことから始めるべきなのではないでしょうか。

最後になりましたが、常磐大学教授 池田幸也先生 と 認定特定非営利活動法人 水戸こどもの劇場 副代表理事 横須賀聡子さんには、たくさんの貴重な助言をいただいたばかりでなく、「子育てトークカフェ」の運営に際してもご助力をいただきました。声をお聞かせいただいた方々も含め、ご協力いただいた皆さまに、スタッフ一同、心からのお礼を申し上げます。

2013年8月

子育てどう（Do）？プロジェクト運営委員会
松井 由佳・小野村　哲